

第16回 ちゅうでん教育振興助成（平成28年度）

報告書資料 一般-8 1

学校名・団体名	西宮市立北六甲台小学校
HPアドレス	http://kusunoki.nishi.or.jp/school/krokkoe/
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	北六自然パークをつくろう ～学校と地域のふれあう場所へ～
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>ESD の取組は喫緊の課題となっている。本実践では、武庫川の支流にあたる有馬川をはじめ豊かな自然環境を ESD の視点を取り入れて教材化することによって、主体的・協働的に学びながら知識を習得させていくことをねらいとしている。また、現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組むことで子どもの切実感や知識を学ぶ必要感を内面から引き出し課題解決の方法を模索し考えさせる。このような学習過程を通して、複雑化、多様化している現代社会の問題に立ち向かう力を育成し ESD の実現性や再現性を高めることを目的としている。</p>	

1. はじめに

ESDの取組は喫緊の課題となっている。現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組むことによって、課題解決につながる新たな価値観や行動を生み出し、持続可能な社会を創造していくことを目指すESDの学習や活動は、生きる力を育む上でも大変重要となる。しかしながら、ESDの実践に対するハードルは高く、実践も一過性になってしまっている例も多く見られる。

さらに、ESDの視点に立った学習指導では、右の図のような資質、能力の育成を重視して進められていく。しかしながら教科・領域等の学習において、ESDの視点を踏まえた取組を実現することは、難しいと受け取られてしまっている。

本校は、武庫川の支流にあたる有馬川をはじめ豊かな自然環境がある。この環境を活かしてESDの視点から住んでいる地域を教材化し、総合的な学習の時間と教科の連携を図ることによってESDの実現性・再現性を高める取組を実践した。

ESDを通して育みたい力

- ①批判的に考える力
- ②未来像を予想して計画を立てる力
- ③多面的、総合的に考える力
- ④コミュニケーションを行う力
- ⑤他者と協力する態度
- ⑥つながりを尊重する態度
- ⑦進んで参加する態度

2. 学習の流れ

主な活動時期および内容

第一次 北六の自然について考えよう

4月 オリエンテーション

- ・有馬川について知る。(教科関連：社会「校区たんけんをしよう」)
- ・GTを招き、川の環境を教えてもらおう。

第二次 北六自然パークをつくろう

5月 有馬川探検

- ・水生生物調査を行い、有馬川の水質調査を行う。

6～7月 北六水族館をつくろう

- ・有馬川の生き物の飼い方をインタビューしてまとめよう(ホタル：地域のゲストティーチャー)
(教科関連：国語「インタビューしてメモをとろう」「調べて書こうわたしのレポート」)
- ・魚やヤゴ、サワガニを飼育する。(教科関連：理科「こん虫を育てよう」)

9月 須磨水族園(プロフェッショナル)の方に評価してもらおう。

第三次 北六自然パークの素晴らしさをPRしよう

9月 北六自然パークの素晴らしさを学校全体に紹介しよう

- ・全校児童に校区の自然の素晴らしさをPRする。
- ・2年生を招待し、校区の自然の素晴らしさを伝える。

10月 北六自然パークに地域の人を招待しよう

- ・地域の代表者で園芸ボランティアや地区愛護委員、学校評議員や教育連携協議会委員など地域住民を招待し有馬川の自然について伝える。

11～12月 生き物の未来について考えよう

- ・生き物の未来について考える。
- ・自分たちの住んでいる地域の課題を見つけ、自分たちにできることを考える。

第四次 地域の方に活動の学びを伝えよう

1月 活動をまとめよう

- ・自分たちに身についた力をふりかえる。
- 有馬川・中央公園のクリーン作戦をしよう
- ・地域の川や公園美化活動をしよう。

2月 活動の学びを地域に伝えよう

- ・授業参観で自分たちの学びを地域や保護者に伝える。
- 地域に美化活動を呼びかけよう
- ・ポスターを掲示し、クリーン作戦や地域美化を呼びかける。

3月 引き継ぎ会をしよう(現在継続中)

- ・自分たちの活動で引き継いでほしいことを伝える。

3. 主な活動内容と成果～ESDの実現性・再現性を高める取組として～

【北六自然パークをつくろう～有馬川・中央公園の生き物～】

○主体的に動く子どもの姿を引き出す～有馬川水生生物調査～

子どもたちは、GT指導のもと水生生物調査を行った。有馬川の指標生物の数を調べ、それをもとに水質環境を調べた。調査当日には、子どもたちが夢中で活動し自然のすばらしさを感じることができていた。また、事前の話し合いで「川に行って早く調べたい」という意欲が高まった子どもたちは、放課後学校に集合して下見したり休日に保護者と生き物調査を行ったりしていた。そんな子どもたちを中心として、休み時間や家でしかけをつくって学校の池で実験するなど、主体的に活動する姿が見られた。



○教科を関連することで確かな学びにつなげる

生き物を飼育する中で、理科から総合学習へ探究的な学びへと広げることができた。右の写真は、ヘビトンボのやごが成虫へと羽化した瞬間である。子どもたちが登校した時間にちょうど立ち会うことができた。羽化する瞬間を見入る子どもの目は、きらきらと輝かせ生命の尊さを感じていた。また、トンボだけでなくトビケラがウスバカゲロウへと羽化する様子に出会うこともできた。

理科の学習が総合学習での生き物を飼育する体験をもとにして不完全変態の意味を深く学ぶことができた。子どもたちの体験を知識へと変換し、生きる力へ汎用させる学びがそこにあった。



【北六自然パーク（地域の自然）のすばらしさを伝えよう】

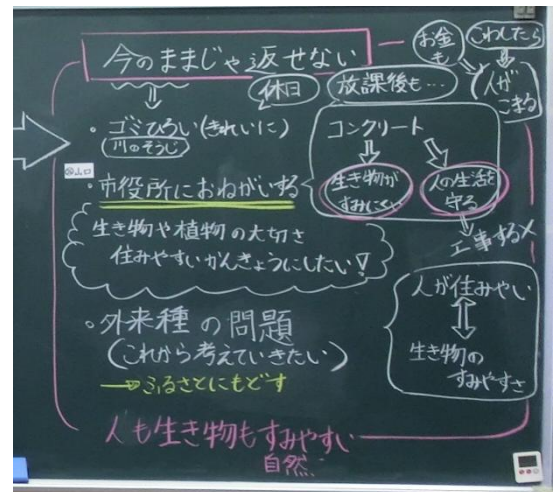
○コミュニケーション能力の育成～校内・地域の方へ伝える～

自分たちの地域のすばらしさを伝えるために校内や地域の方を招待し、生き物ガイドを行った。地域に北六自然パークのすばらしさを伝える中で子どもたちの感想の中に「始めは知らない人と話すのが緊張した。だけど、もっともっとガイドをしてお客さんを楽しませたい」「北六自然パークのすばらしさを知ってもらってうれしい」など、人とかかわることの良さや楽しさを感じていた。また、反省には「おじいちゃんだったからもう少しゆっくり話したらよかった。」など自分の表現方法を振り返り伝えることの難しさを感じることもできていた。



○生き物の未来について考える～持続可能な視点～

子どもたちは、自分たちが1年間世話してきた生き物の幸せを考え未来について話し合った。このまま世話するのは困難な状況にある。しかし、自然に返すと外来種やゴミがたくさんあるから住みにくい。今ある環境ではいけないことに子どもたちは気づいた。現実社会では、解決できない問題が数多く存在する。そんな社会に出た時、しなやかかつ力強く生きていかなければならない。小学生年代では、まず自分たちの身近な問題解決に向けて今ある自分たちの知識を活用して解決の道を模索させる。そうすることで学んだ知識を汎用して社会に生きていくための力を養っていく。自分たちの幸せだけでなく、社会全体の利益や持続可能な社会の実現に向けて環境問題に対して議論することがゆくゆくは日本の将来の担い手となり未来を切り開いていく力となる。



4. おわりに

持続可能な社会をつくるために必要なことは、地域の持つ社会的・文化的背景や対象となる子どもの発達段階によって異なる。この実践では、子どもの学ぶ対象を地域に特化し体験学習を通して地域の課題に出会わせ、主体的・協働的に学習へ向かわせることができた。身近な地域を教材化したからこそ「自分たちの自然を守りたい」といった切実に思う気持ちが表れ主体的に考え、行動する子どもが生まれた。

最後に、ESDの実践は、継続的な取組と子どもの実態に合った系統的な取組が必要不可欠である。今回の実践では、今後この活動を2年生に引き継ぎ子ども同士を繋げることでESDの実現と継続を図りたい。また学校組織としては、1年生から教材を吟味し、系統立てて指導できる体制づくりを整備していきたい。